

学研究報告 3-4 (合冊): 51 (1960). 4) 木村雄四郎・滝戸道夫・高田定一: 日本大学薬学研究報告 8: 22 (1967). 5) 朝比奈泰彦・浅野順太郎: 薬学雑誌 49: 117 (1929). 6) 朝比奈泰彦・浅野順太郎: 薬学雑誌 50: 573 (1930). 7) 木村雄四郎・滝戸道夫・永石寿治: 日本大学薬学研究報告 8: 32 (1967). 8) 木村雄四郎・滝戸道夫・後藤栄子: 日本大学薬学研究報告 7: 55 (1965). 9) 木村雄四郎: 薬局 4: 373 (1935). (日本大学理工学部薬学科)

○アキザキヤツシロラン竹やぶに群生す (濱田 稔) Minoru HAMADA: *Gastrodia confusa* was found in great abundance in Bamboo plantations

数十本の果軸を無造作に握って、これは何んだらうと私の眼の前につき出した学生がいた。1968 年 11 月 10 日、私が大津市石山の日本菌学会関西談話会の採集会から一足先に帰ったあと、付近のマダケ林でみつけたのだという。私は一目見てうなづいた。私の頭の中を、保存一天然記念物、という考えが走った。とるものもとらず中村信一君がバイクで走ったが、その報告は意外であった。付近の竹やぶにはいくらかもあるというのである。その後の調査で、この珍種は滋賀・京都のみならず豊橋・小田原までのモウソウおよびマダケ林内に広く分布することが判った。京都では街中の寺院にまである。日本で最も個体数の多いランかもしれない。しかし 1969 年 1 月、津山尚博士と東京八王寺付近の竹やぶをくまなくさがしたときは、1 本も見つからなかった。また関西以西は調査が不十分であるが、鹿児島大学の調査では無いことはないが稀だという。私は、今、この珍種の分布の中心、竹やぶとの関係などをしきりに考えている。10 月下旬には花が咲き、11 月になれば果軸が伸びるので発見も容易になる。読者諸賢の御協力を期待したい。ちなみにこのランの根菌はオチバタケ類似の担子菌らしく、この菌の中へ種子を蒔くと、直に発芽を開始し、根もすぐ出て大きくなることが林業試験場関西支場寺下隆喜代氏の実験によって判った。(京都大学農学部)

○フウセンダマノキの学名 (水島正美) Masami MIZUSHIMA: The cultivated *Gomphocarpus fruticosus* should be called *G. physocarpus*

南アフリカ原産の園芸植物にフウセンダマノキ (風船玉の木) と呼ばれるものがある。ガガイモ科の低木で、挿木や実生でふやせる。直径数 cm のほぼ球形で先が一寸とがり、全面に柔軟な棘状突起を生ずる。初めは明るい緑色で後に狐色に変るが、この風変りな果実は白い花と共に観賞に価する。田中長三郎博士がインドのハクガラ植物園から種子を台湾へ持ち帰られた (1937 年) のが初と云うから、日本への渡来は其の後と云うことになる。園芸書にはこれの学名が *Gomphocarpus fruticosus* R. Brown と出ているが、*G. physocarpus* E. Meyer を当てるのが正しい。両者は果形を異にし、前者は狭長卵形で先が細まるとがり、これが良い区別点となる。

(東京都立大学 牧野標本館)